

# 千刈狸の呟き

雑談や酒の席でならよくても文章に残すのは憚られる、という事柄がある。このような類の話で頭の隅に引っかかっているものがあつたが、狸の名前で済む本欄なら許されると思ひ書く次第である。それは、ヒトは食物を入れる口は露出しているのに、出す役目の肛門を隠すのはなぜだろう、という疑問であつた。

品のない話だということは自覚している。この疑問を持ったきっかけは、2日ほど続いた宿便後に朝昼2回に分けて大腸の全長  $1\text{m} + a$  に匹敵するくらいのを排出したことだつた。ちなみに、ワインには便秘作用があると経験的に感じているが、これはやはりワインを飲みすぎた後のことであつた。このとき、自分の盲腸と下行結腸あたりを指で刺激しながら大腸運動のペースメーカーはどこだつたっけ、と考えたが思い出せなかつた。そこでさらに、もしペースメーカーを研究するとすれば排便や便意との関連を調べることになるので、被験者は躊躇し対象数も少なく苦勞するだろうと想像した。一方、上部消化管の実験なら被験者はそれなりに集まるだろうに、となぜかアカデミックな方向に思いを巡らせた。このとき頭をよぎつたのが、口に比べて肛門は日陰者だ、ということだつた。

長い前置きになつたが、肛門のイメージはやはり“陰”といわざるを得ない。「頭隠して尻隠さず」ということわざは「足隠さず」でなく尻であるところが嘲笑のポイントになつている。ずっと昔、吉永小百合などのスター女優はトイレにいかない、と信じていたファンがいたというのも排泄行為に負のイメージがつきまどつているからだと思う。

今、世間はグルメという言葉に酔いしれて、レストランを涉猟し華やかに食べ歩くテレビ番組や雑誌記事は枚挙にいとまがない。しかし、食物の最終産物である糞や排泄という機能について言及するのは健康番組くらいのものである。なお、後で調べたら大腸のペースメーカーは横行結腸中部にあるようだ。効果的な刺激部位がどこかは不勉強にして未だ知らない。

## ～ 口と肛門の差 ～

黄門狸

セクハラ、パワハラ、人種差別などに厳しい目が注がれる昨今、口が肛門を差別していることは明白なのに誰もが口を閉ざし声を上げない。かつて、直腸肛門疾患の診療に携わつたものとして、陽の当たらない肛門が不憫である。

ところが、異文化に目をやればこの逆転がないわけでもないようだ。マナーとして人前で遠慮すべきものに口ではげっぷ（嗝気）、肛門ではおなら（放屁）がある。日本人はおならの方を恥ずかしいと思うが、欧米人はげっぷやズルズル音を立てて食べることがより不作法と考えているようだ。かつて英語の個人レッスンを受けていたとき、40代の米国人女性教師が椅子から腰を浮かしブツと音を発したので私は戸惑つたが、彼女は何事もなかつたかのような顔をしていた。こんな洋の東西における差異はどう説明されるのか興味深いところではある。

動物は口と肛門を区別していないようだ。狸はどうか知らないが、たとえば猫は自分や仲間の肛門をなめたその舌で口や顔をなめる。その舌で私も飼ひ猫に顔をよくなめられた。陰部を隠すのは霊長類の中でもヒトだけで、アダムとイブの昔からそうなつているようである。肛門について言えば、これを隠すのは生殖器が隣接しているからだろうか。そう思うのは直腸が手術で腹部に人工肛門を造設された患者さんはそれを見られることにあまり抵抗がないように感じるからだ。しかしそれは単なる私の偏つた印象かもしれない。また、診察を受ける弱い立場として我慢しているからかもしれないので、何とも言えない。

肛門を表に出すことを憚るヒトの習性はどこからきたのか？他の動物とは異なる脳の発達や知性と関連しているのだろうが、この分野に明るい人がいたら教えていただきたいものである。

2013年、和食がユネスコの無形文化遺産に登録された。体内に取り入れるプロセスまでは“優れた文化”と認定されたわけだが、その後についてはもちろん言及されていない。口と肛門の差はますます開きそうな気配である。